

敬 奉 追 悼

待たぬ月日の立つこと早く  
明治天皇の御百日祭も去る六日はや終りを告げて今や第三期喪に入れるも  
追悼の泣止み難く山河草木猶ほ憂戚の色を帶ぶ。恭しく惟れは  
天皇允文允武夙に祖宗の宏謨を紹ぎ中興の大業を成し給ひてより御宇四十  
六載が間に歴史上正に數百年間に比すべき盛徳偉績を擧げさせられ我等六  
千萬の蒼生は日進月歩の聖運を謳歌し千古不世出の 英主を戴けりこ只  
管欽仰し奉りしに曷ぞ圖らむ忽ち諒闇に逢はむこは。三十五年十一月十四  
日の事なりき。大演習後の御招宴今の御幸橋の南兵器廠の在る所にしてあ  
りしに場内狹隘にして文武百官其他羅列の間聊かの御通路を剩すのみなり  
しかば 臨御の際は眇たる一教授の弘さへ畏くも咫尺の裡に 龍顔を  
拜し參らせて且つは無彊の 聖壽を頼み奉り且つは無上の光榮に浴せし  
を喜びたりしに掛けても思ほむや六十一の御齡を以て併も御發病以來僅に

二週間にも満たせ給はず俄かに神去りまさんとは。其頃よりも稍々面やつれさせ給へるやうなる最近の御眞影を拜し奉りて瞑目一番すれば感慨無量腸爲めに寸斷せんことす。

嗚呼二重橋外の廣前を初めこし國內隨所にて現はせる國民の慟天哭地懇祈熱禱も其甲斐なく遂に伏見古城山の淨地に　英靈永へに鎮まりませることの傷ましさよ。

明治大帝の御大葬儀は洵に振古未曾有の大觀にして

大帝の至大なる御稜威は甚深なる御仁徳は萬遍なく茲に反映せられたりさしにも莊嚴なり　御大葬場の御設備も數千の工夫皆其事に預るを名譽さし精神的に働けるを以て僅かに六週間にて竣成したりき。　靈輦の大内山を出でますや都下幾百萬の群衆は肅然として水を打ちたらんが如く無人の境の如く前後の混雜の爲めに負傷せる者だに殆ど無かりき。西の方桃山に遷御あらせらるゝや驛々は云ふも更なり沿道到る處田と云はず畠と云はず堤上に船中に官民士女拜跪合掌して誠を致して奉送しまつりき。而して

御陵參拜者日に數万人。あく古武士の典型と仰がれたる老將軍は　靈幃  
御發引の號砲を合圖に壯烈なる殉死を遂げてこの空前の御盛儀に深刻なる  
印象を添加したり。朝鮮臺灣樺太關東州在住人の各總代が集れる如き列國  
が宮中喪に服せしのみならず各元首の代表者を派して葬儀に臨ませしめ殊に  
英國は儀仗兵を參列せしめしが如きは是れ開闢以來の異例なり。嗚呼懿なる  
哉匹儔なき哉。

天つ日嗣は五十鈴川の水と共に絶えされども行ける　龍駕は復に廻すに  
由なく來る春毎に桃山の花は咲かんも　先帝の還り給ふ日は遂にあるべ  
からず。哀しき哉噫。

然れども此の痛哭の間に時勢は刻々に進展せり。今より我等赤子は哀を歛  
めて　先帝を敬慕するの道を以て

今上陛下に盡さざるべからず。其道他なし　先帝の下し賜ひし教育勅語  
の叡旨を服膺して　今上に仕へ奉り更に忠實なる大正國民たらんことを  
覺悟するにあらんか。情塞がり神逼りて又言ふ處を知らず。只　先帝の

大人格は實に億兆修養の大師表たるべきを思ひ奉りて、聖藻一首を左に  
拜記す。

よりそはむひまはなくとも文机の

上には塵をすゑずもあらなむ

蓋し暇なくとも暇を見出で、勵めこの御訓誠か。在天の御神靈願くは  
照覽あらせ給へご畏み畏みて白す。

大正元年十一月十四日

雜誌部長教授

本 田 弘

乃木將軍歌

敢奪我旗何賊是。一劍逼賊衝堅壘。我旗求之遂不得。臣躬有罪可以死。當時生還  
非所期。欲死不死且忍耻。爾來悠悠三十春。殊恩何以答天子。况復後年旅順城。  
敵彈爆爆百雷起。可憐此地萬骨枯。寤寐使臣生顛泚。何圖一旦山陵崩。愁雲黯慘  
鎖丹陛。臣哭而慟可如何。畢竟天子不問罪。靈輿夜出鳳凰宮。弔礮一轟天流涕。  
億兆吞聲夜沈沈。臣是朝服在私邸。再拜稽首臣希典。以刀割腹今殉矣。妻亦不願  
収此屍。七首三刺入肚裏。夫唱婦和碧血前。精神直欲赴伏水。自知殉死失軌遵。此心  
惟有不得已。嗚呼將軍躬自責。一一心事如可指。吾今招魂恍有聲。肅然聞之一長跪。

教授 野野口勝太郎